資料３

# 第４回旧上瀬谷通信施設における国際園芸博覧会招致検討委員会

平成29年9月27日（水）

横浜市

資料3

第4回 国際園芸博覧会招致検討委員会

# 国際園芸博覧会招致検討委員会 平成29年度想定ｽｹｼﾞｭｰﾙ(案)

※検討項目については、審議状況に応じて変更になります。

| | 国際園芸博覧会 基本構想 主な検討項目 | | | | | | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | ①<br>開催意義 | ②<br>基本事項等 | ③<br>事業展開 | ④<br>会場・行催事 | ⑤<br>関連事業 | ⑥<br>効果・事業費 | |
| 第1回<br>6月5日 | ・開催にあたっての基本的な視点 | | | | | | |
| 第2回<br>7月10日 | ・開催意義<br>・テーマ整理 | ・開催場所<br>・開催期間 | ・事業コンセプト | ・要件整理<br>（会場・行催事） | | | ○現地視察 |
| 第3回<br>8月24日 | ・開催理念<br>・テーマ | | ・気運醸成<br>・広報活動 | ・会場構成<br>・行催事構成 | ・関連基盤整備 | | |
| 第4回<br>9月27日 | ・開催理念<br>・テーマ | ・想定入場者数<br>・面積規模 | ・理念継承<br>・跡地利用 | ・会場計画<br>（配置、主要施設）<br>・行催事計画 | ・輸送・宿泊計画<br>・関連施設計画 | ・波及効果<br>・概算事業費 | |
| 第5回<br>11月2日 | **・国際園芸博覧会の基本構想素案** として各項目を取りまとめ | | | | | | ○市民等からの意見募集について |
| | 市民等からの意見を募集 | | | | | | |
| 第6回 | **・国際園芸博覧会の基本構想横浜市案** として各項目を取りまとめ | | | | | | ○意見募集結果<br>○国への招致要請に向けて |

# Contents


1　基本理念

2　開催意義

3　テーマ

4　事業展開
- 事業展開
- 事業コンテンツ・コンセプト
- 機運醸成・広報活動
- 出展・展示、行催事

5　事業構成
- 開催場所
- 開催年及び開催期日・期間
- 入場者規模
- 会場構成
- 輸送・宿泊計画
- 関連基盤整備
- 地域整備の方向性とレガシー
- 環境共生を目指した地域資源の活用

# ●基本理念

- 地球上の自然環境は、人類の関与によりその姿を変え、関与を行ってきたが故に人類の存在が担保されているという現実がある。
- その関与が過度かつ継続的で、このままでは自然の限界に近づき、あるいは許容を超え、防災・減災の基盤としての役割を含め、人類が自然から享受している生態系サービスが縮退し、人類の存亡に危機を及ぼす状況にある。
- １９９２年の地球サミット（国連環境と開発会議・リオサミット）では、こうした危機感のもと、国際社会の規範となる「気候変動枠組条約」と「生物多様性条約」が提起され、地球環境への国際的な取り組みを大きく前進させたが、気候変動と等しく、生物多様性も重要な課題として認識されている点に留意する必要がある。
- 環境保全と経済発展を両立していくためには、環境負荷の持続的な軽減、自然共生基盤の構築とそれを可能とする人々のライフスタイル、経済的な波及をもたらす技術革新等が重要な要素となる。
- 本年2017年は、その地球サミットから四半世紀にあたるが、地球環境を取り巻く課題へ解決への道のりは遠く、頻発する集中豪雨等の自然災害等、地球から発せられる警鐘はむしろ増えている。
- 一方では、アジアモンスーン域の自然においては、適度な人類の関与があるが故に、人類にとって望ましく、かつ生態系も安定している里山等に見られる自然共生を、地域の知恵と協同により持続してきたという事実がある。

# ●基本理念

- 心豊かな暮らしや産業振興・経済発展を包含しつつ、地球温暖化や生物多様性の喪失、さらには食糧・水資源の不足等、地球規模での課題に対応するには、この自然共生の仕組みをモデル化し、共有することが重要な鍵となる。
- あわせて、国内の状況を鑑みると、超少子高齢化社会に起因した総人口の減少、高齢者層の増加、生産人口の減少が進行しつつあり、従来とは異なる暮らしの在り方や経済発展の方策が求められている。
- こうした状況からは、社会のありようも個々人の気づきや分かち合い、多様性と寛容性の醸成、集から個のネットワークの尊重による、いわゆる成熟した社会の構築が方向性になると考えられる。
- 個人のくらしを尊重しつつ自助・共助で支えあうコミュニティや所有から利用へのシェアリング、感性価値に基づく新たな産業創出等は、一つの処方箋でもある。
- 言い換えれば、自然資源の大量消費やエネルギーの浪費、回復困難な開発に支えられた「豊かさの量的な拡大を求める社会」から、個人や自然とのかかわりに着目し、環境保全と経済発展のバランスを尊重する「豊かさの質を深める社会」への転換を時代が求めていると言えよう。
- 緑と花、農がもたらす実りは、自然との共生や恵み、平和のシンボルであり、豊かさを求める社会から豊かさを深める社会への遷移をうながす一つのアイコンになると考える。

# ①　国際的視点

国際園芸博覧会横浜2026

## 人類が直面する大きな危機

・地球規模の気候変動、温暖化進行、自然災害の多発、地球環境問題の不可逆的ターニングポイントへの接近
・都市化の進行、エネルギー・資源、水・食料の枯渇、環境汚染の悪化
・著しい人口増加（途上国）、少子高齢化･人口減少（先進国）の進行
・異文化の相互不信による衝突・紛争
・精神的健康の喪失、感染症拡大、物資的幸福感の行詰り
・途上国での紛争、貧困、飢餓、格差、教育未達成、衛生保健不備が深刻

## 国際的課題への処方SDGs

・2015年国連サミット採択「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が重要
・『持続可能な社会への変革に誰一人取り残さない。』が中心提言
・先進国、途上国共に取り組むグローバルな17のゴール、169のターゲットを提言
・5つの捉え方の視点：People（人間）Prosperity（繁栄）Planet（地球）Peace（平和）Partnership（パートナーシップ）で普遍的に提言

## 情報科学･技術の進化による未来展望

・情報科学･技術(CIT、AI、IoTなど)による第4次～5次産業革命への期待
・生命科学、情報技術の進化による情報産業、生命産業関連の創発への展望

### 委員会意見からのｷｰﾜｰﾄﾞ

●平和を世界発信
●ICT､IoT活用し産業育成
●雇用へのストーリー
●バックキャストの思考
●環境革命、第4･5次産業革命
●人間は生命圏の一員

### SDGs

目標1：貧困の終結
目標2：食料安全保障、持続可能な農業促進
目標3：健康的生活確保、福祉の促進
目標4：高質な教育確保、生涯学習の促進
目標5：ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ平等、女性女児の能力強化
目標6：水と衛生の持続可能な管理
目標7：持続可能なエネルギー
目標8：持続可能経済成長と雇用の促進
目標9：ﾚｼﾞﾘｴﾝﾄなｲﾝﾌﾗ構築､ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ推進
目標10：国内､各国間不平等是正
目標11：持続可能な都市･人間居住実現
目標12：持続可能な生産消費形態の確保
目標13：気候変動･影響を軽減する緊急対策
目標14：海洋資源の保全と持続可能な利用
目標15：陸域生態系の保護回復持続可能な利用、生物多様性の損失阻止
目標16：平和な社会の促進、司法へのｱｸｾｽ
目標17：ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ･ﾊﾟｰﾄﾅｰｼｯﾌﾟの活性化

# ②　博覧会の視点

国際園芸博覧会横浜2026

## 国際博・園芸博の使命･本質を発揮する場

・国際博覧会は、先進的な技術や国内外の有形無形の特産物を展示し、優れた取組や出展物の顕彰を通じて、人々の交流の場として大きな成果・近年は社会的な課題への提案の機会としても重要な役割
・国際園芸博は、花卉園芸産業振興の時代を経て生命･環境･まちづくりの分野に波及、環境的課題解決提示と市民参加協働の場に進化

## 時代の転換点となる国際園芸博覧会の開催

・地球的規模の環境問題等に対して、横浜・日本が蓄積してきた環境保全のまちづくり、横浜市が目指そうとしているガーデンシティーへの取組等を踏まえた先導的な提案
・最先端の技術の実証の場とすることによる実社会への展開、産業創発の実証や新たな文化交流の場としての機能発揮

### 委員会意見からのｷｰﾜｰﾄﾞ

●時間消費の新ｿﾌﾄ
●体験型　プロセスの展示
●人の交流　拠点としかけ
●ネットワーク、周遊型
●Livable City
●テンポラリー建築の実験可能性
●新たなランドスケープ計画手法
●閉会後の社会･地域への影響が社会的成果
●博覧会はICTの実験場
●次世代情報通信産業の参画

# ③　花緑・園芸の視点

国際園芸博覧会横浜2026

## 人間の命と心を支える基盤の象徴としての花緑

・自然は食と農を支え、恵みと幸福をもたらす人間の生存基盤、国土･都市･地域を支える環境基盤、ゆとりやいなしによる防災基盤等多機能
・花緑はその自然の象徴としての存在、精神の安定・感性を育む精神的基盤かつ、文化･芸術を生み育てる文化的基盤

## 花緑、園芸、農の役割と未来への期待

・健康増進、薬効、癒し･ストレスマネジメント、リハビリなどの医療･福祉分野、また情操育成や自然の中での知育体育徳育や、環境学習などの教育的な機能の新たな機能
・花緑を媒介としたシェアコミュニティ、ネーバーフッドの構築、地産地消・スローフード等の一層の展開
・暮らしに花緑を一層定着させることによる市場拡大、環境保全の技術革新、新たな苗種の創出、ITと園芸の融合

## 花緑に関する日本の優位性

・わが国は華道、茶道、香道、庭園などの伝統文化、江戸期の花卉園芸文化、また生活の中にも花緑を愛でる文化芸術
・里山に見られる自然共生（グリーンインフラ）の実践
・大阪花博で普及したガーデニングが都市緑化やまちづくりへ展開、市民力との結びつきを深化・拡大

### 委員会意見からのｷｰﾜｰﾄﾞ

●園芸の可能性
●園芸文化と新ライフスタイル
●本物（植物 生命）の重要性
●都市農業
●農体験
●食料、生命、暮らし
●日本の自然の四季を花で
●ICT、IoTと園芸
●自然資本財
●緩和策から適応策へ

# ④　日本・横浜・上瀬谷での視点

国際園芸博覧会横浜2026

## 日本での開催意義

・人口減少･超少子高齢化、気候変動による激甚自然災害対応など、人類共通課題に世界に先駆けて直面し解決にあたってきた先進性
・世界最先端レベルにあり、更に飛躍的に高度化する科学技術分野
・縄文期の環境共生社会、江戸期の循環型エコシティ、東日本大震災等を踏まえ、環境適応手法による自然共生

## 横浜での開催意義

・1859開港以来文明開化の玄関口として花卉園芸貿易を先駆牽引
・大都市であって農業花卉園芸業が都市と共存、パンジー、シクラメンなど全国一の栽培農家数のポテンシャル
・港北ＮＴでのグリーンマトリクスや生産緑地など、緑や農と共生するまちづくりの先進的実績や、広がりと厚みの市民力(公園愛護会､森づくり､援農､等)の発揮が可能、第33回全国都市緑化よこはまフェアの成功・Garden City Yokohamaへの展開、環境未来都市の施策推進

## 上瀬谷での開催意義

・242haに及ぶ首都圏最大級の平坦地、郊外部再生への新たなエンジン、世界に向けて平和のメッセージを発信
・大都市におけるまちと農と緑の共存モデル、グリーンインフラを基盤に据えた新しいまちづくりモデル
・グリーンインフラの郊外部への展開の面的拠点基盤、市全域へのトリガー、政府の政策への反映（新たな自然適応策としての先例）

### 委員会意見からのｷｰﾜｰﾄﾞ

●真の田園都市構想
●リバブルシティ
●田園景観の活用
●新たなグリーンマトリクスシステム
●グリーンインフラの戦略的展開起点
●ベッドタウンとマーケットトが至近
●都市に緑を組み込んできた横浜の歴史
●相沢川はグリーンインフラの骨格

# ⑤ 2026年開催の視点

国際園芸博覧会横浜2026

## 世界としての2026年

・愛知目標の達成年かつパリ協定スタート年の2020年から6年経過、SDGsの目標年2030年の目前、人類・世界にとっての折り返し地点2050年まで残り四半世紀にあたる
・地球規模の気候変動、エネルギー・資源、水・食料問題、途上国等の爆発的人口増加、先進国の超高齢化・人口減少加速、人類の危機回避に向けての取組みがより重要

## 日本としての2026年

・高齢化人口減少が進展し影響が顕在化（総人口H28年比約4%減、65歳以上人口比30%:高齢社会白書）、東京2020オリンピック・パラリンピック大会後6年経過し高揚感が沈静、景気減退や縮退感の払拭が必要
・第5次産業革命や新時代を牽引する技術革新による新産業の創発を期待
・新たなライフスタイル･幸福感を示し、新たな価値観の発信が必要

## 横浜市としての2026年

・2019年373万5千人をピークに人口減少（2026年には371万1千人､65歳以上人口比26% :本市政策局将来人口推計）活性化方策が必要
・関東大震災復興レガシーの山下公園から百余年、グリーンマトリクスシステムや生産緑地など、緑や農と都市の共生の先進的手法を先駆的に実現させた港北ニュータウンの起工から半世紀、歴史を踏まえた新たな展開

### 委員会意見からのｷｰﾜｰﾄﾞ

●横浜の都市計画史に着目:震災復興､港北NT､都市農業
●2050年が地球の折り返し
●ライフスタイルチェンジ
●2030年頃国力縮退顕著

## ●開催テーマ（案）

### 豊かさを深める社会の契機・深化に向けて

●地球規模の危機と山積する課題に行き詰まる世界が進むべき方向は、豊かさの再定義による質的成熟社会への転換にあり、経済的な豊かさを主体とした対比的な充足から自然との共生や時間・空間を含めたシェア等がもたらすポジティブな幸福感を深めることが求められている。そして、人類は自然がもたらす生態系サ―ビスの最大享受者であり、幸福感を求める唯一の生き物でもある。

# ３ テーマ

●感性・多様性や寛容性のもとで生命への敬意を基本に自然との共生や心の豊かさを求める感性・価値観を「ハピネス」と表現し、風景は、視覚的なものだけでなく、時の移り変わり、風のそよぎ、土の香り、土地の履歴や空間・環境の総体であり、緑や花は自然との共生、平和や安らぎ、人とのつながり･シェアの象徴である。

●緑と花、園芸、農の本来機能である恵みの価値体験や、人類がその歴史の中で培ってきた文化的側面、精神的効用を再認識し、その今日的効果を国際園芸博覧会という参加体験による実証の場を通して世界に問いかけることは、国際的な課題の解決や未来社会の展望に新しい視点を与え、進展に大きく寄与するものと考える。

●また、日本が自然への畏怖や敬意を根底に培ってきた自然と共生する思想を礎に、水循環や防災減災、産業や雇用、教育や遊び、市民参加など社会システムも含んだ社会的共通資本としての「グリーンインフラ」がもたらす風景は、この地が持つ平和のメッセージとあいまって、国際園芸博覧会に新たな価値をもたらすものと確信する。

# ●事業展開

## 基本的考え方

2017年に開催した全国都市緑化よこはまフェアの成果をステップとし、国際園芸博覧会の開催を契機に、さらに花や緑あふれる横浜を目指し、博覧会を通じた提案やまちづくりを発信していくものとする

例：横浜における時間軸

# ●事業コンテンツ・コンセプト

## 事業コンテンツ

・開催テーマ及び事業コンセプトを踏まえ、旧上瀬谷通信施設にふさわしい次の要素を事業コンテンツとして設定する

花　緑　農　食　大地　交流

## 事業コンセプト

・博覧会のひとつの本質は、過去と未来を象徴的に示すことであり、歴史的な時間軸を踏まえた普遍性と、時代の潮流とも言える先進性を組み合わせることで展開
・「普遍性」としては植物を中心とした生命などの本物（リアル）の世界や交流・参加体験
「先進性」としては最新テクノロジーを活用した、バーチャル、ロボティクス、アートや教育分野の最新コラボレーションやエデュテイメント
・さらに「感動」「時間」「空間」を分かち合うシェアにより、「普遍性」「先進性」の相乗効果を発現

普遍性 × シェア × 先進性

# ●機運醸成･広報活動

## 基本的考え方

●開催までのプロセスを重視し、参加･交流･育成型の機運醸成・広報活動を展開
　取り組み自体が園芸博の構成要素となり、レガシーの発展継承が新たな文化となる様に展開
●会場計画、展示出展・行催事計画との包括的かつ密接な連携
●市民力の深化高度化、新たなネットワーク化･組織化につながるNPO･市民団体への働きかけ
●創造的市民力：文化的価値体系（ブランド）の構築
●閉会後のまちづくりや産業創発･振興につながる、企業･団体へのテーマ啓発、参加誘導

## 【機運醸成の例】

**●準備段階（プロセス）における参加**
・博覧会前から、市民や企業等に参加や体験を誘導する仕組みづくりで参加意識を向上

**●人づくり・組織の育成**
・学校教育や地域コミュニティ等と連携、博覧会閉会後にも残る人づくりや組織育成
・個のネットワーク活用による効果の最大化

**●観光産業・産業分野の育成**
・インバウンド観光による花卉産業の振興、新しい観光のシーズ育成

# ●出展･展示、行催事

## 基本的考え方

- AIPHの規約に基づく国際園芸博覧会の必須事項を確実に実施
- 理念・テーマを来場者に明確に訴求
- 出展・展示は２つに分けて構成
  ①**公式出展**(主催者出展、各国公式出展)　②**企画展示**(自治体､企業､市民･NPO)
- 参加・協働の仕掛けを行うことで、交流・シェアを誘導・促進
- 新しいライフスタイルや生活の価値･豊かさの拠り所を自然や生きもの世界に希求
- 会場構成に加え、市内外のパートナー連携会場、地域周辺の緑・農空間とのソフト連携

## 【展開の例】

- 花緑・園芸の魅力・価値・可能性を普及啓発することで、花緑・園芸の持つ領域の拡大の定着化を図る
- 芸術性、娯楽性、学術性を通じ、花緑･園芸の新しい見方や活用方法を提案する
- 本物（リアル）を感じることで、花緑の素晴らしさを再確認するとともに最新技術(VR、メディアアート、プロジェクションマッピング等)とのハイブリッドな表現により、本物・実物の新たな魅力を引き出す
- 園芸と教育や芸術など異分野とのクロスオーバーな取組みを追及
- 気づきとシェアのコンセプトの通底する演出
- 多様性と寛容性に配慮した構成

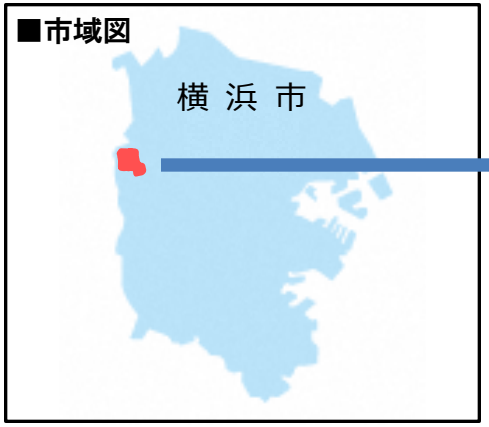
# ●開催場所

## 旧上瀬谷通信施設

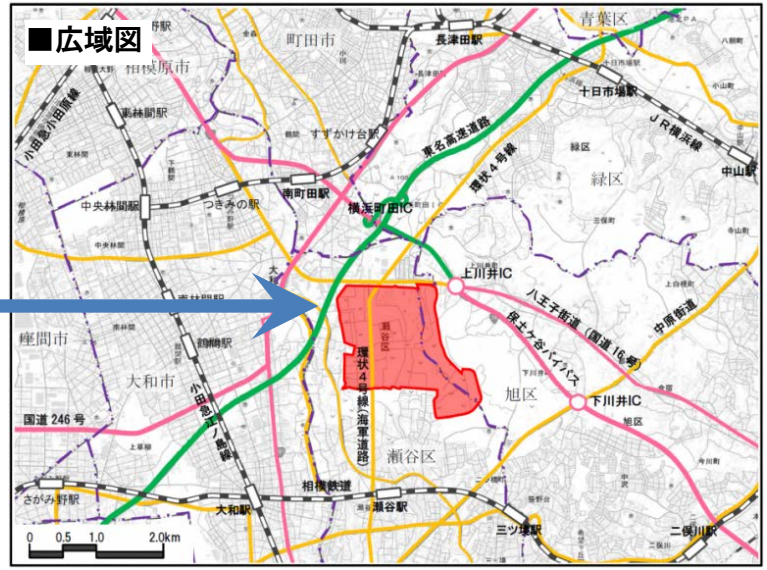
### 基本的考え方

- 平成27年6月に米軍から返還された当該地区は、面積242haと首都圏においても貴重な広大で平坦な土地
- 東名高速道路や保土ケ谷バイパスの高規格道路に近接
- 大都市でありながら、まちと緑と農の良好なバランスを保つ世界的に稀有な横浜市郊外部の拠点的基盤
- 農業振興と都市的土地利用による新しいまちづくりの検討を進めており、大きな可能性を有している

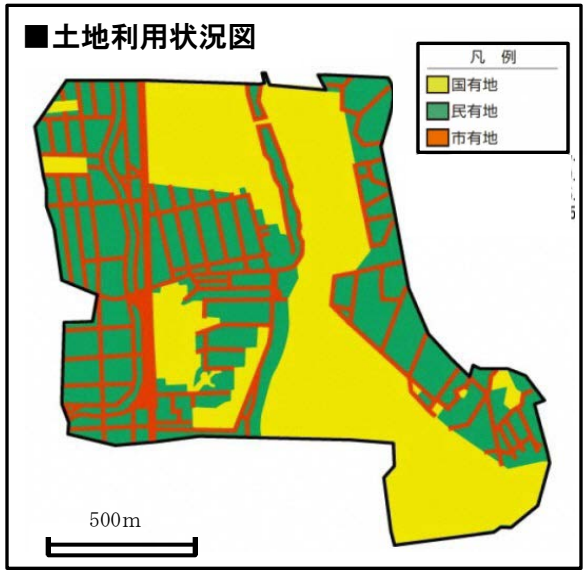
■市域図




■広域図




■土地利用状況図



# ●開催年及び開催期日・期間

## 2026年４月から９月（６か月間）

### 基本的考え方

**<開催年>**

・現時点で、国際園芸博覧会（Ａ１）は2022年（オランダ・アルメール）まで開催決定

・地権者の皆様と進める土地利用計画のスケジュールと調整を図りつつ、最速で2026年の開催とする。

国際博覧会の開催予定

| 年度 | 国際園芸博覧会<br>国際博覧会(認定博) | 国際博覧会<br>(登録博) |
|---|---|---|
| 2015 | | ミラノ万博 |
| 2016 | トルコ:アンタルヤ | |
| 2019 | 中国:北京 | |
| 2020 | | ドバイ万博 |
| 2022 | オランダ:アルメール | |
| 2025 | | 大阪他で申請中 |
| 2026 | 横浜開催の想定 | |

**<開催期日・期間>**

【ＡＩＰＨ規定】３か月以上６か月以下　（Ａ１クラスの開催要件）

【過去の博覧会】初春から初秋のゴールデンウィーク、夏休み期間を含む期間で設定

・３月は植物が霜などの影響を受けやすいため、４月から９月までの６か月間を設定することとする。

・３月から４月のプレオープンも検討（開催前のテストラン等を考慮）

# 5　事業構成

## ●入場者規模

**1,000万人 ～ 1,500万人 ～**

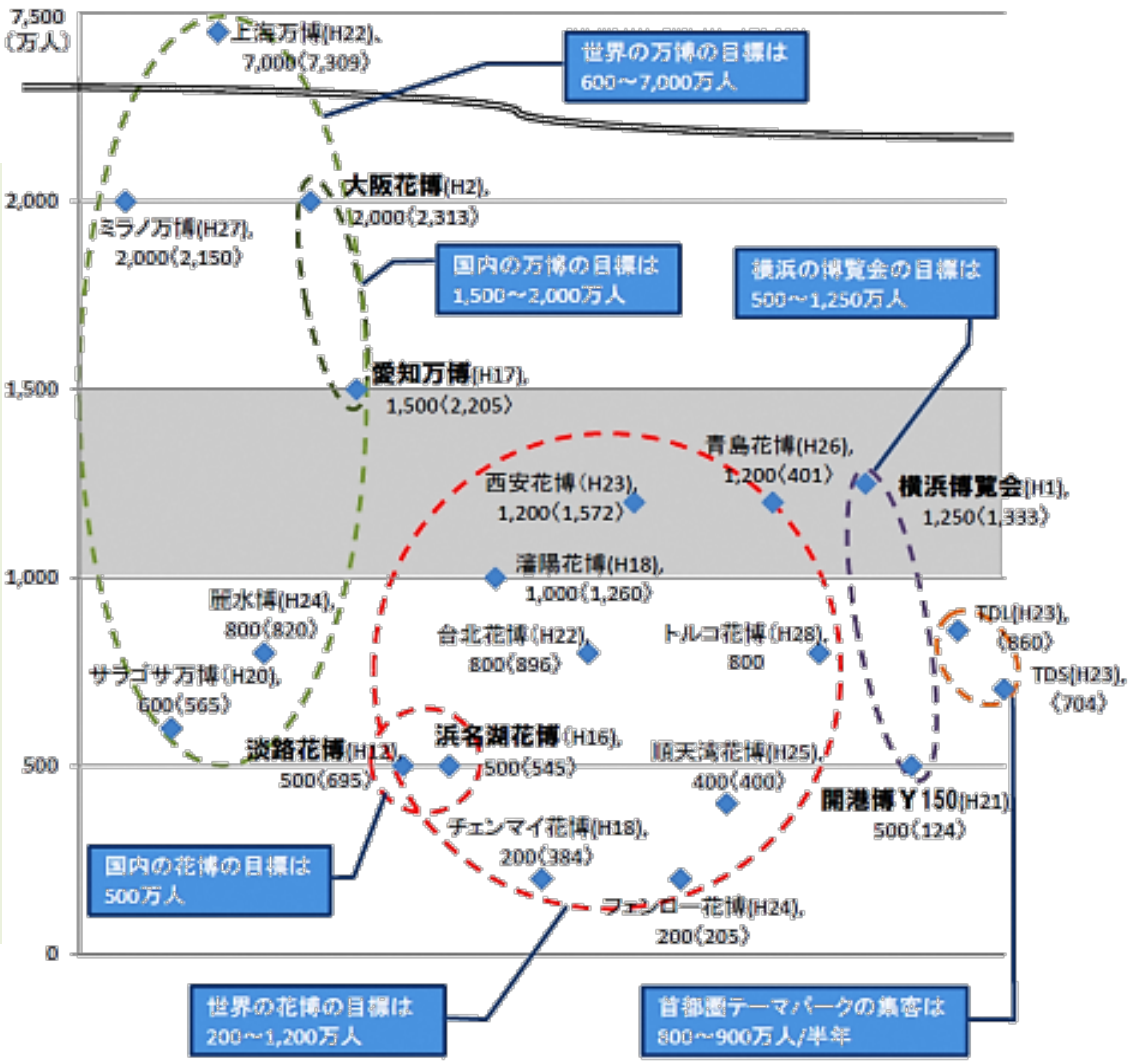
### 基本的考え方

・国内で開催された国際園芸博覧会
　最小）545万人（計画500万人）
　最大）2,313万人（計画2,000万人）

・横浜での開催実績
　1989年横浜博覧会
　➔1,333万人（計画1,250万人）
　2017年全国都市緑化よこはま
　フェア
　➔約600万人（計画500万人）

※輸送計画や会場計画とあわせて引き続き検討

### ■過去の花博等の集客状況




※（　）内は入場者実績値（単位:万人）

# ●会場構成

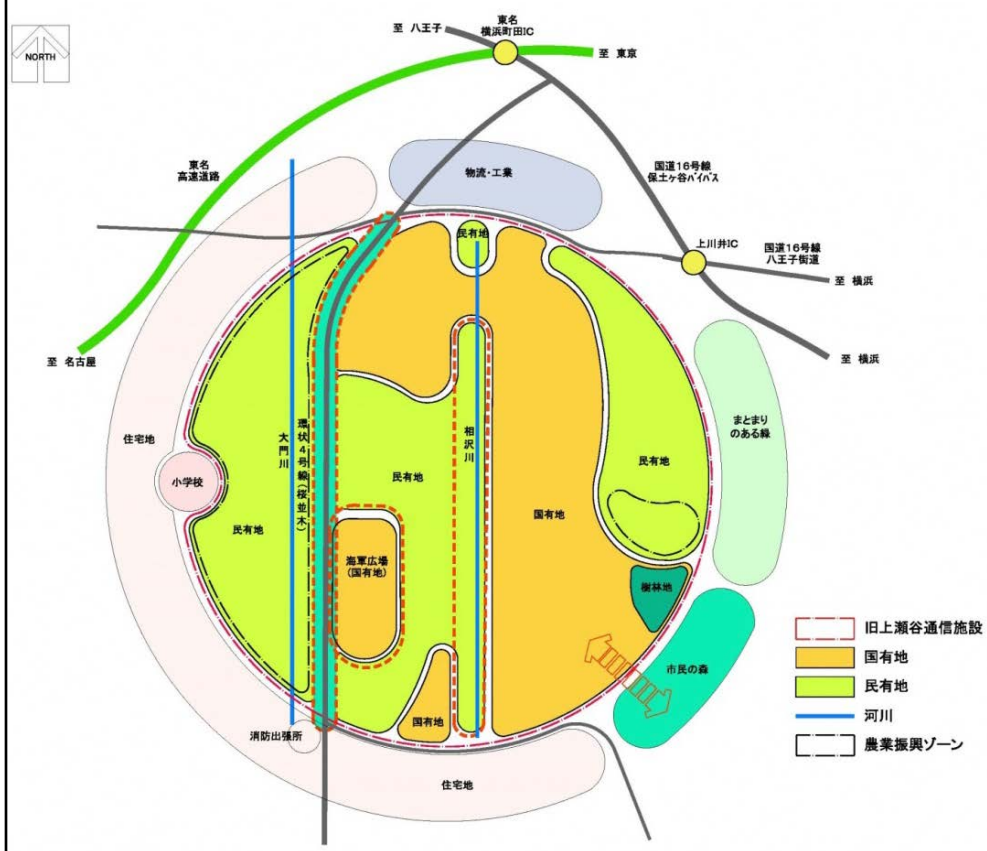
**＜位置・規模＞**
**国有地を中心とした80ha～100ha**
での開催が可能

## 基本的考え方

- AIPHの規定により50ha以上が開催要件
- 242haのうち、半数に近い約110haが国有地
- 過去の博覧会規模から考慮すると80～100haの規模が適切と考えられる
- 旧上瀬谷通信施設の将来土地利用計画等と整合性を図った会場構成とする
- 以下の土地ポテンシャルや周辺状況について考慮することとする

  - 境川水系（大門川・相沢川・和泉川）の保全と利用
  - 市民の森などのまとまりのある緑や周辺農地との連携
  - 周辺の住宅地等への配慮
  - 周辺道路の混雑への配慮

## ■現況概念図



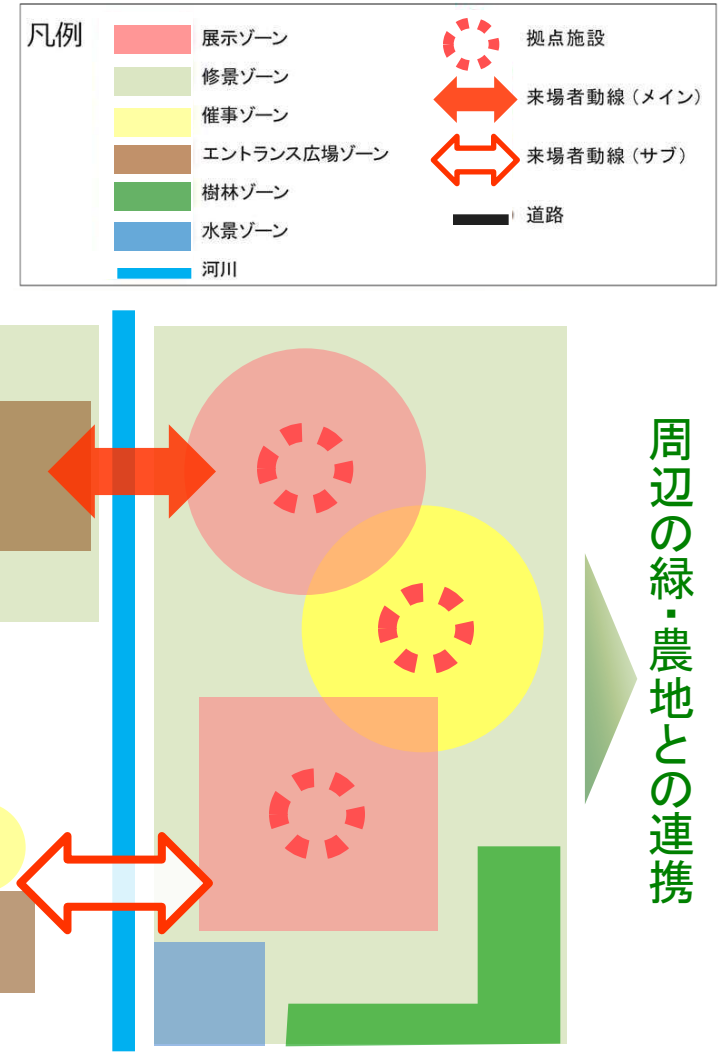

※図は、現況を模式的に示したものであり、
あくまでイメージになります。

# ●会場構成

## 会場計画・ゾーニングの基本的考え方

- 会場全体を一つのグリーンインフラとして捉え、郊外部の拠点基盤となり、市全域に波及する先導的な位置付けとする
- 横浜が取り組んできた港北ニュータウンのグリーンマトリクスの様な、新たな都市と環境のバランスを図った会場計画とする
- 移動時や待ち時間の間でも楽しむことが出来るよう、高度な情報通信基盤の導入や修景で包み込む会場構成とする
- 上瀬谷の持つ広がりなどを実体験してもらうため、屋外の修景･空間演出を重視し、会場外との連続性を確保する
- 無料区域と有料区域の２区域化、夜間開催、横浜市内の観光資源と連携したサテライト会場の展開なども検討

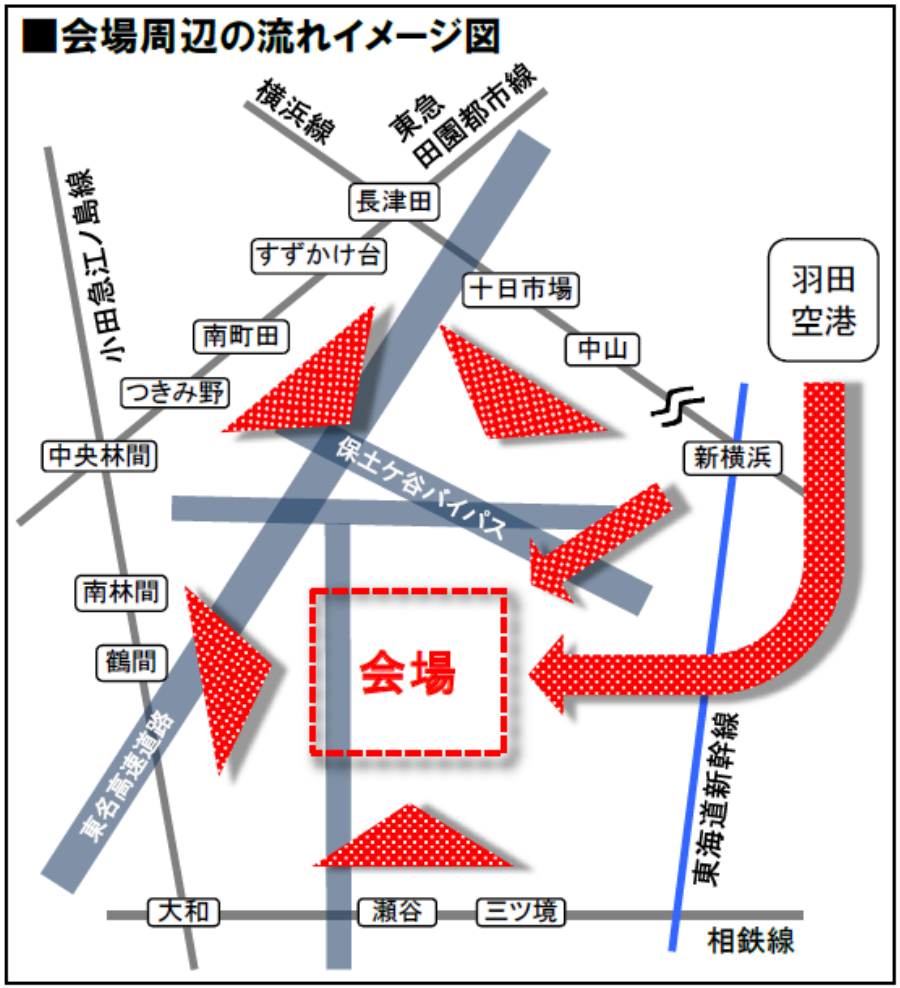
■イメージ図



# ●輸送・宿泊計画－輸送計画

## 基本的考え方

- 幹線道路と近接し、周辺を多くの鉄道路線に囲われている立地を活かし、ひとつのルートに集中することがないよう、多方面に分散させる輸送計画とする
- 博覧会時の交通混雑を緩和するため以下を検討
  ①シャトルバスによる輸送や会場までウォーキングルートを設けるなど、自家用車での来場者を抑制
  ②将来の土地利用と整合性を図りながら、瀬谷駅等を起点とした新たな交通システムやアクセス道路の改善などを検討
- 必要となる駐車場は国有地を中心に配置を検討




【東京圏における今後の都市鉄道のあり方について（答申）より抜粋】
例えば上瀬谷通信施設跡地の開発等に対応する新たな交通については、関係地方公共団体・鉄道事業者等において、LRT等の中量軌道等の導入について検討が行われることを期待。なお、検討に当たっては、開発等の状況とそれに伴う輸送需要の動向を踏まえつつ、まずはBRTを導入し将来的に中量軌道等に移行するなどの段階的な整備も視野に入れるべき。

# ●輸送・宿泊計画－宿泊計画

## 基本的考え方

・東京2020オリンピック・パラリンピック大会の開催にあたって整備される宿泊施設も考慮し、横浜市内の宿泊施設を中心に首都圏の波及を検討する。
・国際園芸博覧会の新たなアクティビティとして、参加・滞在型となる宿泊可能性も検討する。

全国都市緑化よこはまフェアより（グランピングサイト：里山ガーデン）

# ●関連基盤整備

## 必要とされる主なインフラと現況

・国際園芸博覧会の開催に必要なインフラは以下が挙げられるが、長年米軍施設であったことから、区域内のインフラは未整備である。

- ●給排水施設：上水道、下水道　（隣接の主要道路に幹線が埋設されている）
- ●エネルギー関連：電気、ガス
- ●情報通信

## 関連基盤整備の考え方

・博覧会開催時は一時的な需要増加が見込まれるため、将来の土地利用計画と整合を図りながら、恒久的な需要を想定した周辺の幹線との接続を検討する。

・博覧会時の一時的な増加分は仮設を含めた効率的な施設計画を検討する。

※仮設の場合、環境に配慮した計画を検討する。

# ●地域整備の方向性とレガシー

## 会場跡地の考え方

●郊外部の活性化拠点を形成するため、3つの要素で土地利用の検討を進める

・農業振興（活力ある都市農業の展開）

・活力創造（産業振興、賑わいや交流を促進）

・公共・公益（本市を含む広域的課題や地域の課題を解決）

●博覧会のレガシーを継承発展するために、会場の主要区域を都市公園とする

＊公園の検討の視点

・空間を最大限に活用し、郊外部のグリーンインフラの拠点的基盤として、水･緑･農の骨格を形成

・新たな発想に基づいてPPP/PFI等の公民連携を取り入れ、地域活力を創出

・災害時には、広域防災拠点としての機能を発揮

●グリーンインフラに基づく美しいまちづくりをガーデンシティーの一環として市域のまちづくりで実践、国内外に波及

●市民組織等を会期後も新たな市民力の仕組みとして持続的に展開

●環境共生や行催事で行われた取組の発展的な継続等

# ●環境共生を目指した地域資源の活用

## 国際園芸博覧会における環境配慮の方向性

・開催意義、テーマにおける「緑や農と共生するまちづくり」「グリーンインフラ」などのキーワードを会場全体に波及させ、先進的なモデルとして体現する。

・来場者が自ら環境を意識し行動できる取組（横浜G30プラン）

## 環境配慮の例

・雨水を浸透、貯留することで水が循環する会場づくり

・多自然川づくりを基本とし、生物多様性の確保に配慮する

・再生可能エネルギーの積極的な利用、最新技術の展開

・発生する廃棄物の抑制、資源として活用し、ゴミの発生ゼロを目指す

・パビリオンなどの仮設建築物のリサイクル

※ごみ減量（横浜Ｇ30プラン）

●市民や事業者が積極的に参加し、横浜市と協働でG30行動が実践され、自主的なごみ減量やリサイクル活動や環境に配慮した行動により、前倒しで計画を達成。

【主な取組】

・３Ｒ運動の推進
・事業系古紙の分別排出の徹底
・建設木くずの資源化促進
・食品関連事業者に対する食品リサイクルの推進
・容器包装類の店頭回収促進
・缶・びん・ペットボトルのリサイクル推進
　⇒ごみ減量30%を５年前倒しして達成、
　　２つの焼却工場を廃止